

『自然に学ぶ暮らし』

石田 秀輝 いしだ ひでき

はじめ

・問題提起 筆者の考え

① リサイクルや省エネルギーだけでは、追いつかないほど、地球の資源は少なくなっている。

太陽光などの自然を利用した新しいエネルギーが開発されたり、よりいっそう資源を節約する方法がかんがえられたりしている。

資源の利用のしかたを見直すと同時に、新しい暮らし方を一から考えなければならぬ。



② 大事だと思うのは、自然そのものから学ぶこと。地球に生命が誕生して三十八億年もの間、生き物たちはさまざまな環境に適応しながら、生きてきた。人間以外の生き物は、電気もガスも使っていない。自然の仕組みを上手く利用しながら生きている。

私たちの生活に応用できるのではないか。

③ 自然の仕組みをうまく利用するとはどのようなことでしょうか。



中

・事例①「空気調節」

④ シロアリの巣に学んだ空気調節の仕組み。

⑤ トンネルによって温度を調節する仕組み。

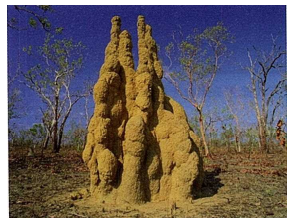
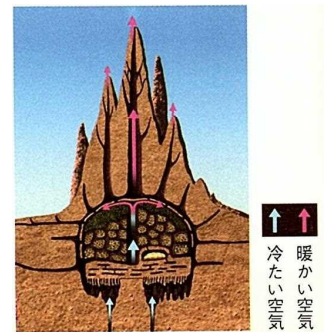
シロアリの巣

↓巣の中のたくさんのトンネルの中を空気がめぐり、巣の中の温度を調節している。

ジンバブエのショッピングセンター

・応用↓えんとつなどによって空気をめぐらせて、温度の高い空気と低い空気が自然に入れかわる。

・効果↓空気調節に必要な電気を九十パーセントも減らすことができた。



⑥ 小さな穴によって湿度を調節する仕組み。

・応用↓小さな穴をこわさないようにしながら、土を固め、かべやゆかを作る技術の開発。

・効果↓湿気の多い日本でも、エアコンを使わずに湿度を調節することが可能。



・事例② 「あわ」

⑦ 生き物のあわの使い方学んだお風呂開発。

アワフキムシの幼虫のあわ

・ 空気の層によって熱をにがさない

というあわの性質。

↓ 気温の変化から身を守る。

ベタが作るあわ

・ 表面が縮もうとするあわの性質。

↓ 卵をくっつけ、水面にうかせる。

太陽の光をいっぱい浴び、早く卵からかえることができる。

これらの働きを、お風呂に応用する。

暖かい空気の入ったあわを作れば、

・ あわが体を温めてくれる。

・ さらに、あわは、はじけるときの力で身体のごれをとってくれる。

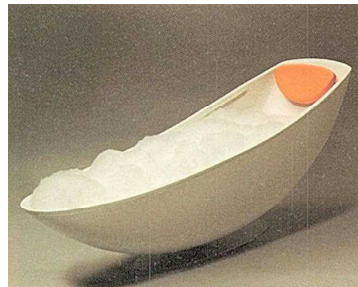
・ 取れたよごれは、あわの表面にくっつく。

あわを使い捨てせずに使うことができるようになれば、

・ お風呂が使う水の量はおよそ三リットル程度で十分だと考えられている。

・ 洗い流さずに済むあわの研究とともに、現在、開発が進められている。

・ 少ない水量で済むお風呂が実用化されれば、限りあるみずを大切に使うことになる。



・事例③ 「エネルギーを開発する」

⑧ 自然の仕組みに学んで、エネルギーそのものを
作り出す試みもなされている。

暮らしの中で使うちょっとした電気を作る方法。

トンボの羽

・羽の表面に凹凸があり、この間に
空気のうちがでできる。

・うずが外側の空気を運ぶので、
トンボは少しの風でも飛ぶこ
ができる。

この仕組みを使って、小さな風力発電が生まれた。
・うちわであおいだほどの風でも、発電できる。

作り出す電気量は少しだが、

・ラジオを聞く。
・補聴器の電気のプレゼント。
・電池にためたエネルギーをだれかに貸したり、
借りたりできる。



終わり

・まとめ 筆者の意見

⑨ 今の生活の在り方を問い直し、自然から学ぶことで、新しい暮らし方が見えてくる。

私たちの未来の生活には、資源を使うことに関してさまざまな制約がある。

しかし、その制約の中で、
・どのような暮らし方ができるかを一から考えることで、資源を守り、私たちがいつまでも暮らしていける社会ができる。

多くの自然に囲まれた日本では、昔から、自然とうまく付き合いながら暮らしてきた。

そんな日本に生きる私たちだからこそ、
・自然の仕組みを生かした新しい暮らし方を、一からつくっていくことができるのではないでしょう。

自然に学び、新しい暮らしの在り方を考えていくこと。

それこそが、これからの私たちに求められる社会のえがき方なのです。